

ザアカイの回心

ルカ福音書19:1-10（新改訳2017訳）

- 19:1 それからイエスはエリコに入り、町の中を通っておられた。
 19:2 するとそこに、ザアカイという名の人がいた。彼は取税人のかしらで、金持ちであった。
 19:3 彼はイエスがどんな方かを見ようとしたが、背が低かったので、群衆のために見ることはできなかった。
 19:4 それで、先の方に走って行き、イエスを見ようとして、いちじく桑の木に登った。イエスがそこを通り過ぎようとしておられたからであった。
 19:5 イエスはその場所に来ると、上を見上げて彼に言われた。「ザアカイ、急いで降りて来なさい。わたしは今日、あなたの家に泊まることにしているから。」
 19:6 ザアカイは急いで降りて来て、喜んでイエスを迎えた。
 19:7 人々はみな、これを見て、「あの人は罪人のところに行って客となった」と文句を言った。
 19:8 しかし、ザアカイは立ち上がり、主に言った。「主よ、ご覧ください。私は財産の半分を貧しい人たちに施します。だれかから脅し取った物があれば、四倍にして返します。」
 19:9 イエスは彼に言われた。「今日、救いがこの家に来ました。この人もアブラハムの子なのですから。
 19:10 人の子は、失われた者を捜して救うために来たのです。」

【祈りながら考えよう】

- (1) ルカ18:27によれば、ザアカイは神の国に入るのは不可能な金持ちであったのに、なぜザアカイは回心できたのですか。
 (2) ザアカイがいちじく桑の木に登ったのはなぜですか。
 (3) 脅し取った物を、律法が要求している以上の4倍にして返すと言ったのはなぜですか。

【解説】

ザアカイの回心は、主が「人にはできないことが、神にはできるのです」（ルカ18:27）と言われた真理の実例である。ザアカイは金持ちであった。普通だったら、金持ちが神の国に入るのは不可能であった。しかし、ザアカイは救い主の前に謙遜になり、自分の富を自分の魂と神との間に置くことをしなかった。

（1）ユダヤの取税人

《それからイエスはエリコに入り、町の中を通っておられた。》

エリコという町は、エルサレムから北東へ25キロにある町で、紀元前8000年紀には周囲を壁で囲った集落が出現した。世界最古の都市として知られている。世界で最も標高の低い町でもある（海拔マイナス250m）。

当時は、エルサレムに次ぐユダヤの中心地で、東西の交通の要所となっており、十万近くの人が住んでいた町で、北から南に、あるいは東から西に通じる重要な地点にあったから、様々な商品を運んで通る商人のキャラバンが絶えなかった。

そこには大きな取税所があった。税関である。商人が商品を持って通過するそれに対して、税金を取り立てていた。税関には、多くの取税人がいた。

ローマ帝国に征服された民族は税を納めなければならない。ユダヤも征服された国であったから、彼らが軽蔑してやまない異邦人であるといえども、ローマに税金を納めなければならなかった。

ローマ帝国は政治的に老練であり、巧みであった。だから征服した国の事情をよく理解し、ユダヤ人のように宗教的に自分たちは特別な神の民で、自分たち以外の諸民族、諸国家はすべて異邦人としてはっきり区別しているものに対しては、ローマ人の手によって直接税金を取り立てないで、特別にユダヤ人の中から税を徴収する者たちを募集し、これ



に直接に税を取り立てる仕事を委託した。税を取り立てる者になった者たちのことを、取税人と呼んだ。

取税人はそういうわけで、ユダヤ人仲間から毛嫌いされ、軽蔑されるということを知覚の上でこれを引き受けた人々である。だからそこに何かの役得がなければするわけがない。税を取り立て、必要以上に取り立てて、これをもって私腹を肥やす、そういうことが当然のことのように行われていた。だから取税人といえば、金持ちが多かった。

（2）取税人のかしらザアカイ

《するとそこに、ザアカイという名の人がいた。彼は取税人のかしらで、金持ちであった。》

①ザアカイという名前の意味

ザアカイは、「汚れない、正しい」という意味を持った名前である。ユダヤ人たちは、神を信じる信仰の中に生まれ、信仰の中に育っていく民族であるから、その名もそれにふさわしい名前が付けられる。神を信じて清い人間であってほしい、正しい人間であって欲しいと親は願った。

②取税人のかしらとなる

ザアカイは親の期待を裏切り、彼はユダヤ人でありながらユダヤ人に最も嫌われる取税人になってしまった。周りからも排斥され、汚れた不正な人間として、罪人として、考えられ扱われていた存在である。

しかし、人が何と言おうと、この世の中、金がなければ話にならない。ローマ帝国が支配する世の中で、この帝国に刃向かうことなんかできない。この支配の中で、よろしくこの身の幸福を計っていくべし、といったような考えもあって、ザアカイは若き日に取税人の仲間になったと思われる。

税金を一生懸命取り立てて、同時に巧みに自分のふところをこやし、財を積み重ね、年を経て取税人のかしらにまでなった。また金持ちになった。

③ザアカイの悩み

しかし、そのザアカイにも悩みはあった。お金さえあればと思い、ついにそのお金を有り余るほど手に入れた今、彼は本当に幸福であったのかと言えば、そうではなかった。

お金や物や名誉や地位を身に付けると、人は幸福になると思いがちである。しかし、そうしたものを身に付けると、誰でも孤独になってしまう。心を開いて話し合える友だちがいなくなってしまう。ザアカイもそうであった。人々はザアカイを恐れていた。しかし、心を開いて話しかけてくれる人は一人もいなかった。

（3）背が低かった

《彼はイエスがどんな方かを見ようとしたが、背が低かったので、群衆のために見ることはできなかった。》

①イエスにお目にかかりたい一心

ちょうどその頃、彼は主イエスがこの町に来られるということを耳にした。彼は一目でいいから主イエスにお目にかかりたいと思った。

というのは、この主イエスこそは、他のユダヤ教の先生方とは違い、取税人や罪人や売春婦たちとも平気で付き合いおられるということを聞いていた。また、主イエスのお弟子の中には、カペナウムの税関で取税人をしてたレビ（マタイ）という人がいるということを知っていた。

《彼はイエスがどんな方かを見ようとしたが》という《見ようとした》というのは、ギリシャ語の原典で見ると、未完了という動詞の形であって、過去において継続を表す言葉である。見ようと思いつつあった、という動詞である。

もうだいぶ前から、イエスがどんな人かひと目会ってみたいと切実な思いで、イエスを見ることを思いつつあったのである。この時突然思ったのではない。いよいよつる思いで、イエスを見たいと願いつつあった、ということである。

②木の上に登る

しかし、日ごろの彼の行いを知っている人々は、彼を仲間に入れてはくれない。彼がいくら主イエスにお会いしたいと思っても、彼らと一緒にそうすることはできなかった。

そこで彼は一計を案じた。主イエスを見たいと思っても、あいにく背が低く、人垣の後ろからでは到底見えないと思った時、とっさに彼は1つのことを思いついた。それは、主イエスが通り過ぎるとされる道端に生えている大きないちじく桑の木に登ったのである。

大の大人が、しかもエリコの税関長ともあろう者が、木の上に登ろうとは、とても正気の沙汰とは思えないが、彼は必死であった。おそらく下の方からは余り見えない所、葉がよく茂っていて、誰かが木の上に登っているなどとは思えない所、しかも、上の方からは葉の間からよく見える所を選んだ。

③主イエスの温かい呼びかけ

待つことしばし。主イエスの一行は、少しずつ近づいて来た。彼は内心ドキドキした。「もしも主イエスの一行がこの木の下に来て、少し止まって下さらないだろうか。そして、ちょっと顔を上の方に向けて下さらないだろうか」と虫のいいことを考えながら、息をこらして待っていた。

すると、主イエスは、彼の願っていた通り、その木の下まで来ると、足を止め、顔を上の方に向けられた。彼が固唾をのんで、主イエスの御顔を見ていると、主イエスはいきなりこう言われた。

《ザアカイ、急いで降りて来なさい。わたしは今日、あなたの家に泊まることにしているから》

ザアカイはびっくりした。予期しないことが起こる時、人はだれでも度肝を抜かれてしまう。どうして主イエスは自分の名前を知っておられるのか。どうして自分のような者に声を掛けて下さったのか。混乱した彼の頭の中に、主イエスの御声の温かい響^{ひびき}がこだまして、それはただ頭の中だけに留まらず、彼の全身を包んだ。

一体、今まで誰がこんな温かい言葉を自分に掛けてくれたことがあったか。彼が求めていたものは、この主イエスの一声ですべて満たされた。彼が求める前に、主イエスはこの罪人に目を留めて下さり、語り掛けて下さり、この罪人の家に泊まると言って下さった。

彼の固く凍り付いていた心は、一瞬にして溶けた。主イエスがどうしようもない罪人のザアカイを愛して下さった。その愛によって、彼は捕らえられた。

④私たちもザアカイと同様である

私たちもザアカイと同様に罪人である。しかし主イエスは、このような罪人も愛して下さっている。主イエスは、私たちが求める前に、この世に来て下さり、私たちが求める前に、私たちの身代わりとして十字架上で私たちの罪の刑罰を受けて下さった。そして私たちを招いてくださる。

招きに応えるなら、たといどのような人生を今まで送っていたとしても、主イエスは私たちを罪から救って下さる。

(4) 喜んでイエスを迎える

《ザアカイは急いで降りて来て、喜んでイエスを迎えた。》(6節)

ザアカイは言われたとおりにし、《大喜びでイエスを迎えた》。彼が回心したのは、きっとこの時だったのだろう。

(5) 罪人の客となる

主イエスがザアカイの家へ入って行くのを見ていた人たちは、主が悪名高い《罪人のところに行き客となった》と言って文句を言った。

主がこの世に来られた時、どの家に行かれたとしても、そこは「罪人の家」だったが、主を批判する人たちは、その「事実」を見落としていた。

(6) ザアカイの悔い改めの実

①取税人の人生に変化をもたらす

その時、ザアカイは主に対してこう言った。

《主よ、ご覧ください。私は財産の半分を貧しい人たちに施します。だれかから脅し取った物があれば、四倍にして返します。》(8節)

救いはこの取税人の人生に根本的な変化をもたらした。彼は自分の《財産の半分を貧しい人たちに》施すつもりであることを救い主に告げた(彼はこの時まで、貧しい人たちから可能な限りの金を巻き上げていた)。

彼はまた、不正な手段によって得た金銭を《4倍》にして返すつもりだった。律法が要求している以上のことをしようとした(出エジプト22:4,7、レビ6:5、民数記5:7)。



《賠償に関する律法の規程》

◎「もしも、牛であれ、ろばであれ、羊であれ、盗んだ物が生きてままで彼の手もとにあるのが確認されたなら、それを二倍にして償わなければならない。…人が金銭あるいは物品を隣人に預けて保管してもらい、それがその人の家から盗まれた場合、もしその盗人が見つかったなら、盗人はそれを二倍にして償わなければならない。」(出エジプト22:4,7)

◎「あるいは、それについて偽って誓った物をすべて返さなければならない。元の物を償い、また、それに五分の一を加えなければならない。彼は自分が責めを覚えるときに、その元の所有者にそれを返さなければならない。」(レビ6:5)

◎「自分が行った罪を告白しなければならない。その人は償いとして総額を弁償し、それにその五分の一を加えて、償いの責めを果たすべき相手に支払わなければならない。」(民数記5:7)

②慈善行為を自慢しているのではない

貪欲に支配されていたザアカイは、今や愛に支配される者となった。一読しただけでは、まるでザアカイが自分の慈善行為を自慢しているようにも読める。しかし、そのような意味でないのは確かであり、彼が善行によって救いを得たかのように考えるのは間違っている。

彼は、キリストにある新しいいのちによって、過去の罪を償いたいと思った。救いを神に感謝し、自分の財産を神の栄光のため、隣人を祝福するために用いたいと願うようになった。

8節は、損害賠償について聖書の中で最も強い調子で語っている箇所のひとつである。救われたからといって、その人の過去の不正が自動的に正されるわけではない。

未信者の時に作った借金は、新しく生まれたからといって、帳消しになることはない。救われる前にもし金を盗んでいた場合は、神の子どもとされた恵みを本当に感じているならば、盗んだ金を返さずにはいられないはずである。

③本当の悔い改め

ここに、ザアカイの悔い改めが表明されている。これは強制的にそうさせられてそう言っているのではなく、彼が自発的にそう言っている。悔い改めの実である。もし彼が不当に人々からだまし取った物が彼の全財産の8分の1以上あったら、彼は破産してしまわなければならない。

本当の悔い改めは、そんなことを計算などしない。心底からの悔い改めは、誠実性がそこに表れる。ただ口先だけで自分の罪を認めるだけで終わらない。償いが必要な場合には、それもする。罪ときっぱり訣別することが必要である。だれが見ても、主イエスを信じ、主イエスの弟子として生きているということが表明されなければならない。

(7) 救いがこの家に来た

《イエスは彼に言われた。「今日、救いがこの家に来ました。この人もアブラハムの子なのですから。》(9節)

《イエス》は《救い》がザアカイの《家に》来た時、はっきり告げられた。彼がアブラハムの子であったからである。救いが来たのは、ザアカイがユダヤ人に生まれたからではなかった。「アブラハムの子」という表現は血のつながり以上のことを表している。それは、アブラハムが主に対して働かせた信仰をザアカイも同様に働かせたという意味である。救いがザアカイの家に来たのは、彼が施しと償いをしたからではない。救いの結果であって根拠ではない。

(8) 失われた者を捜して救うために来た

《人の子は、失われた者を捜して救うために来たのです。》(10節)

「罪人の家に泊まった」と言って非難した者たちに対して、イエスは、《人の子は、失われた人を捜して救うために来たのです》とお答えになった。言い換えれば、ザアカイの回心は、キリストがこの世に来られたまさにその目的の成就だった。

主イエスが天からこの世に来られた目的は、罪のために神から離れている人たちを神に立ち帰らせて、救うためである。この主イエスとお目に掛かる時、どんな人でもそのすばらしい救いにあずかることができる。